

現代中国における商業施設の多義化現象

—南京市イケアストアを事例に—

YAN Zhuo

本研究は、行政主導の都市化のもとでの現代中国の都市空間の変容のプロセスを背景に、政策形成に影響を与えるフォーマルなメカニズムが限られているにもかかわらず、人々が都市の生活にいかに関与的に適応しているのかを解明することを目指して、イケアストアという外来の消費施設における人々の空間利用の実践の意味を分析する。

中国の都市化に関する数多くの先行研究により、中国の都市化は政府の政策に強く影響されていることが明らかになっている。1978 年以降、改革開放に伴い、中国は外国資本を積極的に受け入れ、都市開発を改革の優先アジェンダとして捉えている。このような背景から、2000 年頃、カルフルーやウォルマートなどのグローバルフランチャイズとともに、スウェーデン発祥のチェーン家具量販店イケアが中国市場に参入した。

しかし、消費施設であるイケアストアでは、消費以外の行為も多く見られている。2013 年 11 月 4 日の記事「Ikea in China: Store or theme park?」で、BBC News が中国のイケアでの様々な人々の行動を詳しく報道した：中国の利用者の観光、睡眠、社交など多様な行動について詳しく紹介している。この記事は、中国の買い物客が欧米の消費主義的なライフスタイルに追随しているという一般的な心配とは異なり、イケアが中国の環境に適応した欧米のブランドの興味深い例であると指摘している。

実際に中国のイケアストアではどのような活動が行われているのか？なぜ、人々はイケアストアでこのような活動をするのか？また、なぜ、このような行為が起こりうるのか？こう言った問題意識を原点として、本研究は、イケアストアの多義的な利用の実態を把握することと、この現象が生じる社会的プロセスを解明することを目指している。

そのため、本研究は、マクロな都市計画とミクロな個人実践の両面から、イケアストアの出来事を検討する。

まず、第 1 章では、イケアの歴史、文化的意義をレビューし、続いて中国の都市化過程とその特徴について説明している。

第2章では、イケアと公共空間に関する先行研究をレビューし、本研究が公共空間と中国都市に関する研究を補足できると主張する。研究者たちは、急速に著しい発展を遂げた中国の都市を、都市政策、中国における都市化の特徴とメカニズムの観点から分析してきた。中国における公共空間については、長い間、研究者は欧米の都市研究に基づく理論的な枠組みやツールを採用し、それらを中国の都市現象の解釈に適用してきた。これに対して、マイクロ次元での人々の能動的な空間利用の実践に注目する本研究は、イケアストアでの出来事を記録した新聞記事や個々の利用者による SNS への書き込みの分析、参与観察、および、利用者へのインタビューを通して、利用者の日常実践に焦点を当てている。

第 3 章では、イケアストアの建設のプロセスに着目し、中央政府と地方政府の両方から、政策が中国における都市空間の創出に与える影響について分析し、改革開放以来 30 年間、中国の中央政府と地方政府は、さまざまな行政レベルで、計画や政策を通じて、イケアの中国進出に有利な条件を作り出してきたことがわかった。また、イケアストアの建設を分析することで、中国政府が一枚岩でない、中央と地方の間には、都市開発の決定においてある程度のコンセンサスがあるが、動機づけと執行には微妙な違いがあることが明らかになった。

第 4 章では、4 つの節を通じて、幾つの側面から、イケアにおける利用者の多様な実践と実践背後にある人々の考えを分析した。第 1 節では、都市政策においてあまり考慮されていない子どもたちや、世代間ケアのために移住してきた高齢者に焦点を当て、彼らのイケアでの経験や彼らがイケアストアにいる理由を分析している。第 2 節では、「打卡」を切り口に、インターネットの普及がイケアストアという物理的空間にどのような影響を与えたか、そして同時に、その影響にもかかわらず、人々は物理的空間において能動的な実践を行っていることを示している。第 3 節では、Whyte (1980) のニューヨークの都市空間に対する観察を手がかりに、イケアストアというセミパブリックな空間で人々がどのように会話や休憩、食事など、豊かな社会生活が営まれていることを検証している。最後の節では、「家」とイケアで行われている実践との関係に注目し、「住居に関する改造」と「住居に関する戦争」の両面を取り上げている。日々の大切な実践の場として、また重要なイメージ・シンボリックとしての住居は、都市の住民に大きな影響を与えたことを明らかにしている。

第 5 章では、本研究の考察と今後の課題について述べている。現代中国の都市住民は急激に変容させられる都市の中で能動性を失ったわけではなく、都市の変化を受け入れながらも、ミクロな空間を自分なりに理解し、また変化させている。政策と市場の両方の力によって作られたイケアストアで、人々は、積極的に新たな可能性の存在を捉え、自らの日常的な実践で空間の規則を書き換えている。本研究は、このような当たり前だと見える日常的な実践には、より大きなシステムの力への

応答があり、創造的で大きな可能性がある」と指摘する。最後に、イケアストアの利用とジェンダーの関わりと、政策主導の都市化に対する民衆の意識やその意識が実践に与える影響を、今後の課題として提示する